

詩編 第41編 2節

「主は彼を見守り、彼を生きながらえさせ、地上でしあわせな者とされる。どうか彼を敵の意のままにさせないでください。」

秋空特有の澄みわたった広がりがある。雲一片も見当たらない、紺碧の空がどこまでも続く日がある。また、広がる雲間から陽光が鋭く差し来る日もある。今日の空、雲模様は少し不思議だ。敷き詰められた雲にぽっかりと開いたところが二三見える。まるで天の窓のようである。そこから見守っておられる方がいるような雰囲気、広い空に見える。

空を仰ぐときには様々なわけがある。落胆し、手の施しようがないとき思わず空を仰ぐ。疲れ果て吐息をつくとき仰ぐ空もある。晴れわたった日、山の頂に立ち仰ぐ空もある。絶望のとき、喜びのおり、いずれのときも仰ぐ空がある。いかなるときにも広がる空がある。仰ぐ者を拒否することがない空がある。

雲間に開く空の窓、その果てにおられ、愛の眼差しを注がれるお方がいる。空の果てではなく、空を仰ぐ者の傍らまで来られたお方がいる。傍らどころか、空を仰いでいる者を住まいとしてくださるお方である。遥かに仰ぎ見るけれども、仰ぐ者のハートと共にいてくださる喜びがある。それが、地上でしあわせな者とされる日々の体験となる。

2022年10月24日